ＪＡＢＥＥと新カリキュラムで新たなスタート

建築生産の考え方を深めていく建築のあり方とは

2022年5月16日、日本大学津田沼校舎４号館建築事務室にて

出席者／ 浅野平八（元教授・建築計画）
塩川博義（教授・建築環境工学）
永井香織（教授・建築材料施工）
北野幸樹（教授・都市計画）
亀井靖子（准教授・建築計画）
下村修一（准教授・建築構造）

生産工学の中で建築を学ぶということ

塩川／生産工学部は、今年からJABEEの認定を受けて、新しいカリキュラムを取り入れ始めました。1952年に工業経営学科が設置されてから、現在の生産工学部建築工学科まで、設立の経緯や特色を振り返った時、将来の展望として、われわれがここの教育をどう引き継ぎ、また、どう変えて、どういう教育を目指しているかを語り合っていきたいと思っています。初めに、70年代からこちらで教鞭を執ってきた浅野先生から昔の話をうかがいつつ、各先生方の経験してきた実学的な生産実習のこと、少人数教育の居住空間デザインコース（以下居住コース）のこと、JABEEを採択した理由や新カリキュラムの内容などに込めた思いをお話いただきたいと思っています。

浅野／僕らの入学時（1965年）は、仮称・第１工学部だったんです。郡山が第２工学部ということだった。それが、郡山は工学部に。こちらが生産工学部となった。最初から、生産実習があって、２、３年生の時にやりました。

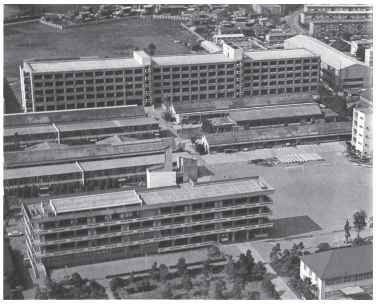
塩川／２年間も実習があったんですか。

浅野／そうです。卒業研究もその生産実習の流れで企業側が指導することもできました。教員が少なかったという背景もあるけど、いろいろな企業の研究所のバックアップで卒論を書いたこともあったんですよ。

塩川／浅野先生の学生時代も、生産工学部の中の「建築学」は、他との違いを意識していましたか。

浅野／当時は１年生から４年生まで、全国から学生が来ていたから、全国を各ブロックに分け、１年から４年生が集まってチームをつくり、BS（ブラザー・システム）を組織し、年に１回文化祭みたいな発表会や、イベントをやりました。若木滋先生とのつながりで、前川國男が講演に来て、「建築は設計者だけじゃダメなんだ。現場をきっちりやる人が必要で、それで現場監督、現場を管理する人がいないと、いい建物ができない。この学部はその現場技術者を育てることが使命だと聞き、それはいいことだと思い、今日ここに来ている」と話した。理論より実践ということで、構造や施工、生産管理の体系があって、１年生から設計もやっていて、他学部にはなかった。それがユニークだった。だから、全国から学生が来たし、先生も、半数くらいは他所から来た人だった。しかし、

Asano Heihachi
1945年福岡県生まれ。69年日大生産工学部建築工学科卒業。71年同大学院理工学研究科建設工学専攻修了。89年、「地域集会施設の機能構造に関する研究」で工学博士取得。94年から2015年まで日大生産工学部建築工学科教授。19年より住宅産業研修財団大工志塾塾長。



1970年代の津田沼校舎。
上／昭和40年代の生産工学部津田沼校舎正門（出典／『日大生産創設60周年記念誌』）
中／昭和45年の津田沼校舎（出典／『日大生産創設50周年記念誌』）
下／昭和40年代の授業風景（出典／『日大生産創設50周年記念誌』）

いつの頃からか生産がやっていることは、理工と一緒、理工に行けない人が来る、というようになってしまった。僕らが入った時に生産工学について、主任教授の小島重次先生に聞いたことがあってね、「それをみんなで考えるんだよ」、「それが君たちの勉強なんだよ」と言われて、それで、僕らが建築生産工学研究会というのをつくったんだ。未だに続いています。

もうひとつ生産工のトピックスとして、宗正敏先生が学部長(1989～91年）になって、居住コースができたこと。地域を含んだ居住空間を対象として、居住に特化してデザインをやれば、生産工学部の特性を活かした設計教育ができると思いました。

北野／居住コースができた時のことを、もう少し聞いていいですか。私たちの時代の居住コースのイメージは、モジュールを覚えたり、身体スケールを覚えたり、手でつくったりでした。今のお話ですと、居住空間というのは地域を組み込んだ対象範囲だと。そこに軸足を置くってことは、デザイン教育に特化しようとしたのか、建築を生産から考えるところに特化しようとしたのか。当時の理念はどうだったのでしょうか。私としては、そこを継承できなかったのではないかという、自己反省があるのですが。

浅野／結果的に生産と居住がつながっていったんだと思います。そういうふうに思ったのは、最近、日本大学高等工学校初代校長の佐野利器の本を読み返して、もともとそうだったのか、と感じたところです。

北野／今でも、生産という学部での定義づけが続いているんですよね。ここで言うのはふさわしくないかもしれないですが、すごく悩ましいなぁと思うところがあります。先生のお考えでは、建築の生産の位置づけと、生産工学部と言った時にはどんな立ち位置になるのでしょうか。

浅野／それはね、1996年に大学院将来検討というのをやった時、「知の組み換え」という言い方をして、機械とか、電気とかを全部バラして、生産工学専攻科にして、自分のテーマにつながるものを、学科をまたいでやるという議論をした。生産工学とは、既存の体系を組み換えて、新しい知的体系をつくることなんですよ。ものづくり、ものづくりと言い続けてきたけれど、知的生産も入るし、理想と現実、理論と実践、というのも方向づけられていると思うんですよね。

研修・実習プログラムと体制の変化

＊AEコース・ADコース／1980年度より導入した建築工学科内のコース制。ＡＥ（エンジニアリング）コースは一般建築技術者を対象として、技術および図面の製作能力を養成し、構造設計、設備設計法を総合的に修得させる。AD（デザイン）コースは建築家志向の学生を対象として、デザイン能力を養成し、生活環境の総合者としての建築家、都市計画家に必要とされる資質と能力を養う。

北野／ＡＥ（エンジニアリング）・AD（デザイン）コースをつくったのも、生産工の特色のひとつでした。

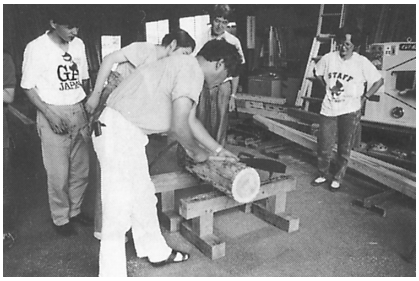
浅野／当時は神谷宏治先生がいらしたから、設計コースの授業として成立したところもありますね。

永井／それはわかります。私の同級生は、神谷先生に習いたいから生産工に来たって言っていた人がいっぱいいましたから。

塩川／意識が高い人がたくさんいたんですね。

永井／そうですね。デザインを目指す人たちはみな、入学時から希望する先生を決めていました。

北野／1980年代後半で、受験生がたくさんいた時代ですね。工学系の大学の受験生が多かったんですよ。



上／1992年国内研修旅行「トンカン大工道場」で、丸太切りや鉋かけの実習を行う
下／1999年国内研修旅行「奈良と京都の歴史的環境・建築物巡り」平城宮址でのグループ写真

1980年代後半で、その頃の学生数は300人くらいいました。

塩川／300人を超えた時もあったよね。先生の数も多かった。

浅野／先生も多かったけど、助手、副手の数も多かったんですよ。

塩川／僕がこちらに来た時は、教員と助手で36名くらいいたんです。

浅野／ひとりの先生に3人、助手、副手がついていたんです。

塩川／確か36名のうち、13名が助手だった。だから、助手会みたいなものをつくっていて、若手の教員と助手の交流があった。

北野／88年当時で教員が助手も含めて31名いました。

亀井／その頃の卒業生は247名です。

浅野／非常勤の先生もいっぱいいらしたよね。

塩川／そうそう。様変わりしましたよね。今は、助手は2名だし。一昨年に古田莉香子さんがくるまではゼロでしたから。

亀井／今は、助手の古田さんを含めて19名です。

塩川／今年の定員は198名ですよね。実際は200名ちょっとくらい。80年代から教員がだんだん減っていって講座制が崩れていき、基本的に助手がとれなくなっていった。昔は、教授、准教授、助手が研究室にいて、テーマを継続的に研究していましたのにね。

北野／そう言えば生産工学部の特色として、昔は、国内研修旅行がありました。浅野先生が棟梁の技術史を学ぶという報告を書かれていて、内容は三宅島へ行って「棟梁に学ぶ家の光景」というものでした。こういう実体験する研修旅行って、いつからやっているんですか。

浅野／いいことを聞いてくれました。当時、大成建設の設計本部長だった清水一先生が来た時に、実学の中で、学生が建築材料のこと、特に伝統である畳や和紙、木材を知らないのはよくないよねと、実際に見に行くことにした。それには東京だけじゃダメだから、全国各地に行こうと。清水先生の人脈で、工場や現場を手配してもらって、廻ったんですよ。生産現場を歩き、質問も品質管理に関わることが多くって、先生方はたいへん喜んでいました。

永井／学生の参加は何名くらいだったのですか。

浅野／30名くらいでした。第1回目は学生が企画して。僕が助手の時には、幹事役を引き受けて約20年くらい続けたんです。そのだいぶ後で、京都の職人たちを集めた京都研修旅行をしました。いわゆる有名建築を見て歩く研修旅行ではなかった。

北野／当時、そんなことをやっている大学ってなかったですよね。

浅野／やってなかったね。

北野／70年くらいに始めたという記録があります。この時代に先生と一緒に行きたかったですね。

永井／すごく楽しそうですよね。

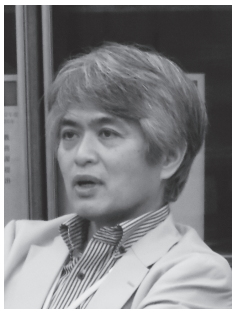
浅野／大成建設設計本部長の清水先生が声をかければ、すぐに現場が対応してくれた。神谷先生が来た時も、著名な先生がみんな講演に来てくれた。磯崎新とか、岡本太郎とか、大物がどんどん来た。そういうのが学生の記憶に残っているんだと思う。日大出身の教員だけでない人の強みだよね。それが理工との区別化にもつながった。

永井／私は大学受験の時に、生産工学部と理工学部があって、どっちにしようかと迷っていたら、指

＊生産実習／学部創設時の 1966 年から実施されている必修科目。3 年生全員が実習を行い、実務を通じて将来像をより具体的にイメージし、実践力を養う。2022 年現在、数千の企業や官公庁と連携している。

No.	授業形態		内容
1	全体説明		シラバス（学習到達目標、概要）、NOTESとSYSTEM？
2	事前学習	講義Ⅰ	実習先の選択から決定までの流れ
3		講習Ⅰ	自己分析・企業研究とは？、社会が求めるスキル？
4		講義Ⅱ	学内公募一覧、実習先希望調査について
5		講習Ⅱ	業界説明、OB講演：「仮）業界の今とこれから」
6		講習Ⅲ	実習体験談、自己分析と企業研究のその先？
7		ゼミⅠ	自己分析(スキル）と企業研究の確認、報連相と助言
8		講義Ⅲ	マッチング、目標設定、自己紹介書について
9		ゼミⅡ	目標設定と自己紹介書の確認、報連相と助言
10		講義Ⅳ	自己分析（スタイル）、事前連絡等について
11		講習Ⅳ	マナー講習：社会の一員として備えるべきもの？
12		講習Ⅴ	安全・倫理講習：エンジニアとして備えるべきもの？
13		ゼミⅢ	自己分析と事前連絡・準備の確認、報連相と助言
14		講義Ⅴ	実習日誌、評価・所見、健康管理、お礼状について
	実習		
15	事後学習	講義Ⅵ	実習の振り返り、目標達成度の点検について
16		講習Ⅵ	実習経験を通じた成長、経験を将来に活かす？
17		講習Ⅶ	進学・就活体験談、目標達成度、次の目標・挑戦へ？
18		ゼミⅣ	実習日誌、振り返り、お礼状の確認、報連相と助言
19		講義Ⅶ	成果報告書・概要、成果発表会について
20	成果発表会		生産実習成果発表会

上／2022 年度の生産実習カリキュラム（学部統一）　下／37 号館で展示された 2021 年度の生産実習成果物



Shiokawa Hiroyoshi
1961 年神奈川県生まれ。83 年日大理工学部建築学科卒業。85 年同大学院理工学研究科建築学専攻修了。87 年より同生産工学部工学部助手になり、2011 年より教授。博士（工学）。専門は建築音響、サウンドスケープ、音環境デザイン。

導の先生が、「ほとんど変わらないよ、ただ、生産工学部は実学に近いから、学術的にやりたいなら理工かな」という説明を受けたんです。父が建設会社を経営していたこともあり、それなら実学に近い生産にしようと決めました。

亀井／生産工学部と言えば生産実習ですが、永井先生はどんな実習をされたのですか。

永井／実は告白すると（笑）、生産実習を受けてなくて……。当時海外研修旅行が生産実習に代わると聞きました。なんと海外研修旅行は 40 日間でアメリカとヨーロッパなど世界中を廻れるんです。海外には一度も行ったことがなかったので、親に相談したら、そんな機会は滅多にないから行ってよいと言われました。それに行くと夏休み期間まるまる旅行なので、生産実習に行くことができない。自分でテーマを決めてレポートを提出して、実習単位を取りました。

北野／僕らの頃は、お金を払えば生産実習の単位が取れた、なんて言っていた。（笑）

永井／当時の引率者は川岸梅和先生だったんです。

北野／僕も次の年に行こうかと思ったのですが、どうしても行きたい建築家の事務所があって、実習で行けることになったので、そちらを選びました。

塩川／あの頃は世界旅行でしたよね。

永井／スケジュールはタイトでした。睡眠不足になって、どんどん時差が重なりました。

北野／そうやって世界中の建築を見たり、国内の生産現場を実体験するというようなことが、僕らの頃は共存していて、それが、AD コースと AE コースを選ぶことにつながりました。

浅野／しかし、お金で買うのは問題だったよね。（笑）

永井／学生にはそんな意識まったくなかったですね。でも、こんな貴重な経験は、学生でないとできないです。

亀井／下村先生は、理工学部出身なので実習はされていませんよね。

下村／こちらに着任して、いちばん印象に残っているのは生産実習なんです。教員になる前は企業の研究所にいたのですが、研修なしでいきなり研究所配属だった。現場経験をしてないんです。設計だったら、設計事務所でバイトして現場の体験ができますが、エンジニアリング系を目指している学生が、施工現場などでバイトすることってあまりないんです。だけど、こちらでは必修なので、否が応でも行かなくてはならない。後のことを考えると、その経験はとてもいいことなんです。こちらに来てから、そのことをよく学生に話します。単なる現場見学ではなく、社員に近い立場の者として受け入れてもらう。何年か前の学生は、日本でいちばん大きい現場の施工管理の生産実習に行って、いろいろな経験をしてきました。面倒くさいと思う学生もいるけど、財産になっていると感じます。この生産工学部が設立当初からやっていて、とてもいいことだと思いました。

30年続いた居住空間デザインコースの遺産

＊居住空間デザインコース／1991年、女子学生30名を対象としたコースとして開設。建築家宮脇檀氏が研究所教授として就任し、コース担当の専任教員として曽根陽子氏（元教授）が着任した。住設計と住環境を中心として「眼を養い、手を練れ」を教育理念に建築教育を行い、その教育方針は、中村好文研究所教授、渡邉康教授・亀井靖子准教授に引き継がれている。2022年度からの新カリキュラムをもってコース制は終了し、2024年度に最後の居住コース学生が卒業する。

宮脇塾講師室編著『眼を養い 手を練れ』（彰国社刊 2003年）には、居住空間デザインコースの教育の神髄がすべて詰まっている

Nagai Kaori
1967年東京生まれ。90年日大生産工学部建築工学科卒業。同年大成建設技術研究所入社。技術センター建築技術研究所構工法研究室材料チーム副主査研究員を経て2011年退社。同年より日大生産工学部准教授。2017年～18年Aachen工科大学・FraunhoferILT客員研究員。21年より教授。専門は建築仕上材料と施工。歴史的建造物等の材料工法調査、超高層建築物の維持保存などに取り組む。

北野／生産工学部が新たに始めたJABEE認定のため、３コースあったものをすべて止めてプログラムをひとつにしました。居住コースは91年に始まって、現在２年生、３年生、４年生が在校していますが、彼らが卒業すればコースそのものがなくなります。生産の大きな特徴だった居住コースの集大成について、この機会に教える側の浅野先生と教わった側の亀井先生から、お話を聞きたいのですが。

浅野／さっき北野先生から居住空間は地域も含むという確認があったんですけど、でも、結果的には、授業として、地域計画まではいけませんでした。最初できた時は、宮脇塾だった。カリキュラムや非常勤の配置なども含めてすべて宮脇檀先生にお任せしますと。だから宮脇先生の色がぐっと出た。塾長通信を宮脇先生がつくって、常に自分の考えを伝えようと努力されていたし、それを受け継いだのは中村好文先生だった。振り返ると、歴史に残る住宅作家たちの考え方を濃密に伝えてきたんです。このコースで教えたことを、本にまとめて出版もしました。それも大きな成果ですよね。

亀井／30年でようやく成果が見えてきたのかなと思います。以前は、女性は結婚して、子どもを産んで、離職してしまう人が多くて、人事的な権限をもっている人がほぼいなかった。だから生産実習について、居住コース卒業生に頼んでも、引き受けてもらうのは難しかった。最近は女性の活躍がふつうになり、そういうことが、少なくなってきています。

浅野／女子大の理工学部ができる時代だからね。そういうことを居住コースも最初は狙っていたんですよね。他学部の先生からは、女子学生ばかり集めてなんだ！と怒られたこともありましたが。

亀井／宮脇先生は、授業で設計の話ばかりをするわけではなく、人生どう楽しむかという話をよくされていました。どう生きるかとか、どう楽しむかを知れば、建築もわかってくると、言いたかったような気がしました。

浅野／梁山泊のようなものですよ。

北野／結果として私塾のようなかたちで進んでいったおかげで、新しいカリキュラムに移行する中で、やり方を参考にした部分も大きいいんです。少人数のスタジオ制にして、30人でいい教育をしていたのだから、これを200人にも展開しましょうと。ただ、30人だからできたことを200人でやるたいへんさもありますが、いいものは全員でやろうと。30年間居住コースで宮脇先生や中村先生が考え、やってきたことは、建築を生産から考えることの基礎の基礎だったんじゃないかと。建築を単に見た目とか、空間構成だけでとらえるのではなく、亀井先生がおっしゃるような、人生如何に生きるべきか、ということの基礎が大事だと。そういう理念を全学科で共有しようとして、それに踏み出しているんです。

塩川／居住コースの人は、みんなとても楽しそうでしたよね。

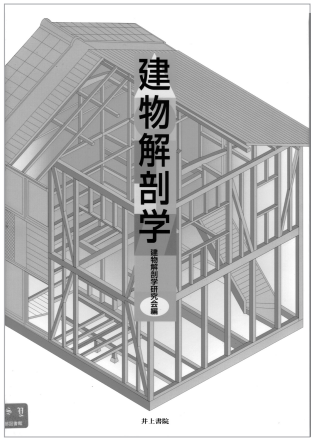
北野／間違いなく楽しそうでした。

亀井／そして、先生の方が学生以上に楽しんでいましたね。

浅野／宗先生が学部長で、小嶋勝衛先生が総長をやっていた時に「金平糖」って言い方していました。小さな出っ張りがいっぱいあるお菓子。全体がまとまるというより、

ひとりが尖れば、全体に波及するという考え方。たくさんの尖りがある金平糖のような大学を目指すと言っていたんです。それを受けて、生産工学部では居住という尖がりをつくろうとしました。そういう共通の考えがあって、居住コースがつくられたんです。

金平糖をつくるための新カリキュラム



2011年に生産工学部建築工学科教員が集まり建物解剖学研究会が発足。その研究の成果をまとめ、14年に書籍として出版。建物全体の仕組みの中の部位や部分を理解するための情報を説き、広く建築初学者や、建築愛好家の手引き書となることを目指した

Kitano Kouki
1968年山梨県生まれ。91年日大生産工学部建築工学科卒業。93年同生産工学部大学院生産工学専攻修了。博士（工学）。同年より助手、専任講師を経て、2016年より教授。専門は都市空間計画。余暇活動と空間の相補関係、持続的まちづくり活動、コーポラティブハウジングなどに取り組む。

北野／新しいカリキュラム（以下新カリ）は、そこを受け継いで動かしていこうとしています。30人で尖がれれば、200人でも尖がっていけるのではないのかと。200人で尖がれば勝ち残れるのではないのかなと個人的には思います。金平糖って、ひとつじゃ美味しくないじゃないですか。バサッとまとめて食べる方が僕は好きなんです。こんなことはあまり会議では言えませんが。（笑）生産の70年の蓄積を、ここで活かしていくという、責任と倫理があると感じています。

浅野／教員が率先してやらないとね。

永井／新カリでは、スタジオ科目でいろいろな先生が参加することになります。今まではひとつの科目をひとりの先生が教えていましたが、分野の違う先生が一緒に、新しい科目を考えていくところが、新しい尖がりになっていくのだと思います。全員が同じ科目を、同じように履修するより、学生の多様な希望にいろいろなかたちで応えていけると思います。今まさに新カリが始まり、再来年から実施するスタジオ科目の中身を揉んでいるところなんです。今年のリーダーは下村先生です。

下村／先ほど浅野先生のお話を聞きつつ、その中の新カリの中身の位置づけを考えていました。新カリで考えているイメージというのが、いい方向に行っていると素直に思います。というのは、「建築生産」ということを考えた時に、設計者だけでなく、いろいろな人たちが関わるんだというところに通じています。建築の教育というと、建築士試験の科目ごとに学ぶようになっていますが、新カリのスタジオ科目は、3年生で、その科目の縦割りに横串を刺すように、横断的にいろいろな先生が関わるんですね。いろいろな視点から、教えるというより、探求するというような組み方をしています。そこが生産工学部のかたちになりつつあるような気がします。あわせて、JABEEも取得し、大学院も横断的なやり方が始まっています。生産工学研究科の各専攻ごとではなくバラして、専攻をまたぐユニット活動をしている。学科だけではなく、学部全体でも、そういう動きが出ていると思っています。

浅野／そういえば、松井先生が学部長の時、みんなで『建物解剖学』の本をつくりました。あれは今どうなっていますか。1年生全員に配っていたでしょ。ああいうところから、いろいろな可能性が生まれてくると思うのですが、なんとか活用できませんかね。

永井／出版時に、1年生のオリエンテーションで配布をしていましたが、その後なかなかできなくなっています。参考書として紹介はしていますが。建築の初学者のために、絵をふんだんに使って、わかりやすく解説する予定でしたが、各執筆者の力が入り過ぎて、一

カリキュラム改定に合わせて刷新した生産工学部建築工学科のホームページのトップ画面「やわらかい建築」

やわらかい建築QRコード

＊キンドリル ／2021年、IBMのインフラストラクチャー・サービス部門を独立させた、従業員9万人の多国籍企業。社内に14名の技術理事がおり、前田氏は唯一の日本人理事として、カーボンニュートラルの実現、COVID-19による生活環境の大きな変化への対応など、サステナブルな建築とデザインの実践、イノベーションに取り組む。

般の専門書と同じようになってしまって。そこを、もう少し改良した方がいいのかなと思っています。

浅野／改良するより、わかりやすく話せばいいんじゃないかな。

北野／ベーシックに使えるテキストになりますよね。スタジオ演習が、複数の教員でひとつの科目をもつかたちにした大きな理由は、異分野の人が手を結ぶと、まろやかな、しなやかな金平糖になるような。その方が学生にとっては、いろいろな分野を学べるかなと思います。新しいホームページのタイトルを「やわらかい建築」にしました。見ていただけましたか。

浅野／見ました、見ました。

北野／いわゆる生産から建築を考える時に、「やわらかい建築」という概念にシフトしたらどうかと思いまして。どうでしょうか。

浅野／「やわらかい仕組み」というのはどうでしょうか。1980年代に村松貞次郎が言っていたことにつながりますが、その先に、どんな将来が見えるのか、どんな仕事ができるのか、もう少し具体的に示せれば、もっとよいと思います。大学の教育はインデックスでしかないんです。すべて理解するなんてできないのだから。インデックス、つまり知の引き出しをどれだけたくさんもつかが大切なんです。僕が今注目している人は、ロンドンで活躍しているプロジェクト・マネージャーの南雲君。生産の出身です。それから、米国に留学したファシリティ・マネジャーの水白さんとか。そして水澤工務店の工事本部長、技術部長、営業部長、は全員生産の出身ですよね。

北野／生産出身者は多様な経歴があって、活躍しているというのが特長だと思います。

浅野／元気塾で、いろいろな人を集めているでしょう。あれを発展させていけば、いいんじゃないかな。

北野／元気塾を始めた非常勤講師の前田啓介先生は、キンドリルの技術理事で生産の卒業生。ご自身の実務経験を活かして、津田沼元気塾、非常勤講師として生産の教育にご尽力いただいています。元気塾のような、いろいろな人がかかわる教育は、今後の新しい発展形として、スタジオ演習の目指すところでもあります。

新カリキュラムのメニューと展望

浅野／新カリの具体的な内容はどうなっているの。

北野／今までは1～4年まで通してコースで学んだかたちでしたが、新カリでは、15の受講科目を自分で選んでデザインしていきます。従来だと、建築家になりたいのであれば、設計コースで設計を選びつつ必要な他の科目は、自分で選べるようにした。今度は、体系づけたコースの縦の線じゃなくて、寄り道ができるように、横断的に学べる体制にしようとしている。到達目標が決まっているわけではなく、目標は一人ひとり違っていいんじゃないかと。

下村／3年生になっていきなり「スタジオ演習」というわけでなく、それまでに教員が枠組みをつくっていかなければならない。2年生の段階で、生産工学系科目があり、キャリアデザイン演習を用意しますので、そこで3年生の時のスタジオ演習のとり方を、学ぶことに

新カリキュラムが目指す学部指標「経験（Experience）は人に学びを与え、学び（Liberal Arts）は人を自由にする」を図式化した、「EL CYCLE」の図

＊クォーター制／１年を４学期に分割して開講する運営システム。同じ科目を週２～３回受講し、約２か月で単位を修得できるため、集中的かつ幅広い学習が期待できる。夏季休業期間を利用した留学や長期生産実習のチャンスが広がる。

Shimomura Shuichi
1979年千葉県生まれ。2001年日大理工学部建築学科卒業。03年同大学院理工学研究科博士前期課程建築学専攻修了。同年より鹿島技術研究所研究員。12年より日大生産工学部建築工学科助教、専任講師を経て、18年より准教授。博士（工学）。専門は建築基礎構造。

しています。最初のスタジオでいきなり始めるのではなく、最初は設計演習を軸にするのですが、そこにエンジニアリング的な要素を融合させて学んでいく。やりながら、専門性を探っていったりするんです。１科目、１テーマではなく、多くの選択肢を用意しつつ、そのとり方を各自デザインしていくようなかたちですね。

北野／スタジオというのは、研究室というのではなく、学ぶ場です。将来的には要望に合わせたプログラムをつくっていきたいですが、まずはメニューをこちらで用意しようと思っています。

永井／各人の興味がどのあたりにあるのかということから始まりますので、メニューをある程度つくって選んでもらう。選び方を見て、われわれはメニューを変えていくんです。

浅野／少人数なんですよね。

下村／25～30人くらいを１チームとして想定しています。確定ではなく、全体でやったり、2～3チームでやったりするパターンを考えています。

塩川／３年以上の実験や設計演習、ゼミナールはなくしました。その代わり学生を少人数のグループにして、2、３人の先生が指導を担当するスタジオ制を導入します。まだちゃんとは決まっていませんが、たとえば建物を設計するにしても、構造や材料などのことに関しても、専門の先生の下で実験的なことをやって、成果を出すようなイメージなんです。今まで実験、設計演習、ゼミナールとかに分かれていたことを、スタジオという名称の授業で、統合的に学べるようにするんですよね。

永井／もっと実践を大切にしたいということになるのでしょうか。

北野／もっとちゃんと、仕組みを学んだり、材料や施工法を学んでいく。今はどうも、設計は設計だけ、実験は実験だけで終わってしまう。それを横につなぐ知識が身についてないように思うんです。最終的には建築としてアウトプットして「なんぼ」の世界なので、それを実現するためのいろいろな知識を横につなぐことを３年生の時にやる。ある意味、解体したものの再構築なんですけど、ぼくらの意識としては、本来やるべきことを積み重ねることなんだと思います。

浅野／今までの必修も、学生によってはやらなくてもよくなるのですか。

北野／やらなきゃいけない基本的なことは、２年生の時までにやります。クォーター制をとっているので、２年生でガッツリやらないと、３年生の時に好きな科目がとれない。今までは、２年生でサボっていても、３年生でとればいいじゃんとなっていた。なので、専門科目を１年生にもやってもらいます。

永井／このあたりが教養科目との単位数の取り合いで苦労したところです。できるだけ２年生の時までに、一級建築士をとるための最低限の科目をとってもらう。それを前提にして、３年生で好きなスタジオ科目を自由にとれるようになります。

北野／もうひとつが、先ほど下村先生が言ったように、大学院との一貫教育。大学院へのスムースな接続を目指しています。その意味で最初の３年間の教育がとても大事になるんです。今、大学院への進学率がとても増えています。建築教育の世界水準の修学年数は５年

＊JABEE／JABEE（日本技術者教育認定機構）は、一定の教育水準にある技術者教育プログラムを認定する機関で、JABEE によるプログラム認定は、技術者教育における国際的相互認証が目的のひとつである。建築学および建築学関連分野の特定領域「建築設計・計画」プログラムについては、JABEE の認定を受けることで、UNESCO／UIA の相互承認により世界中の 教育機関との国際的な Mobility を獲得して、将来において種々の交換プログラムへの参加が可能となるなどの国際通用性が担保される。

ですから、日本も世界標準でいけるようにしたいんです。JABEE や UIA のアーキテクト教育でやっているのは、“建築家”教育だけなので、わたしたちは「生産」という意味でのエンジニアを育てていけたらいいと思います。既存の JABEE とは、一線を画す教育にしていきたい。そうした教育の中心にスタジオ演習があると思っています。

下村／まだ、模索段階ですけど、建物の計画を立てて設計をする時に、スタジオでこれを実現するために必要なことを学生に考えさせる。そういう場をつくっていく。

永井／選んだもののジャッジは誰がするのですか。

下村／自分から、学ぶべきことを見つける。自発的に必要なものを気づかせる。これまでは、科目が机上に置いてあって、それを選ぶだけだったですから。

見直しで気づいた大きな収穫

亀井／今回のカリキュラムの大々的な見直しのきっかけはなんだったのですか。

北野／ものすごく実務的なことを言うと、学部のイノベーションというのがありました。

塩川／現在、生産工学部では、9学科中5学科が JABEE の認定を受けていますが、建築以外の4学科はすでに JABEE をやっていたんですよ。それで、松井先生が学部長をやった時に、建築も JABEE をやるべきという方針を打ち出した。それを受けて建築教室で JABEE ワーキングをつくって検討を始めた。他学科の JABEE のコースはみんな少人数で30人くらい。全学生を JABEE にするというのはやっていない。建築でも2年から分かれる30名の建築デザインコースを JABEE として対応しようという計画もあったのですが、JABEE の方針は1年からやるのが条件だったので最終的に全学生が対象になった。

北野／これから学生数が減る中で、イノベーションをして、生き残りをかけなくてはいけないという時期にも重なったんですよね。それで、イノベーションを含めて考えていくことになった。

塩川／ちょうど日本建築学会から UIA の方針も出たんです。それで6年の JABEE をやるんだったら面白いかもと思った。勘なんですけど、大学院教育と一貫した教育ならぜひやるべきと思いました。

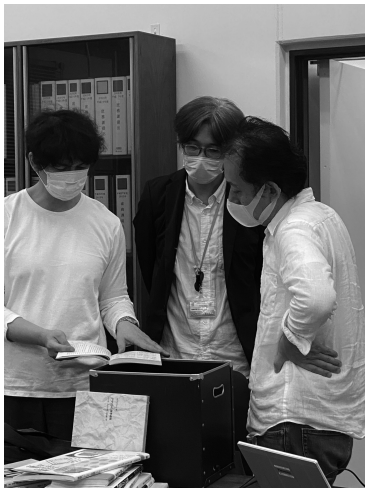
北野／居住コースもちょうど30年経ったことだし、それを全体でやりましょうというのが根本的な理念です。これまでのコースワークではなく、いい教育は全員が受けた方がいい。そして、それを全教員が責任をもつ。

下村／でも、その方がきっと学生も楽しいと思いますね。

北野／教員が楽しそうにやれば、学生も楽しいんです。それの実現のために、もうちょっとがんばろうと思いました。

永井／JABEE を始めるためには予備審査があるんです。ちょうど同じ時期に、新カリのこと、大学院のこともあって、一緒に考えられる機会になったのもよかったですね。昨年度は、毎週火曜日の夜はずっと JABEE の打ち合わせでした。今までと大きく違うところは、以前はシラバスも授業も科目の先生が作成から確認まですべて行っていて、授業の内容には立ち入らな

Kamei Yasuko
1974年東京都生まれ。、99年日大生産工学部建築工学科卒業。2000年～01年ワシントン州立大学交換留学生。02年同大学院研究科建築工学専攻修了。博士（工学）。同年より日大生産工学部副手。14年より准教授。19年～20年デルフト工科大学客員准教授兼研究員。専門は建築計画、住居学。近現代住宅を中心とした建築維持保存・継承、和室の世界遺産的価値に関する研究に取り組む。



学科のカリキュラム委員会で新カリキュラムを考える先生方。左から岩田伸一郎先生、山岸輝樹先生、篠﨑健一先生

かった。それを、今回はシラバスの中身自体もJABEEをリンクさせながら、みんなで確認し合ったんです。他との内容とのバランスをとるため、科目担当者に評価方法や、そのエビデンスのとり方を提示してもらい、それを全員で確認しました。今までやっているようでやっていなかったこと、あった方がいいと思うところなど、われわれの中で気がついたところも多かったのです。その部分で、大きな収穫があったと思います。

下村／全体でつくったカリキュラムを１本化する中で、ちゃんとつながっていくようにする動きは、今まで十分ではなかったこと。スタジオというメイン・コンテンツをつくる中で、それまでの１、２年生の科目の目標をシラバスの中で反映し、意思統一をしながら、担当する先生方の意思も尊重しています。

亀井／JABEEを新カリとともに考え始めた頃、私は海外派遣研究員としてオランダに行っていました。帰国して最初に感じたことは、先生方がとても熱心に自分の教育方針や夢を話しているなと言うこと。

下村／とてもいいなと思ったのは、ワーキング・グループの中で意思疎通ができ、思いを共有できたことです。今まで計画系の先生方がなにを考えているのかがわからなかったんです。たぶん逆もあったんだと思いますが。

北野／そもそもJABEEをやったのは、相互認識するという大前提があったんですよ。自分の科目だけを教えればいいのではなく、トータル４年間でなにを教えるべきか、そういう共通認識をもちました。JABBEをやるというのは、最低限の学力保証をしてます、という立ち位置ですから。亀井先生も、オランダに行く前にずいぶんやったじゃないですか。

亀井／いや、結束した雰囲気は前とはずいぶん違います。

永井／夏休み中も集中して打ち合わせをしていましたからね。

塩川／建築教室で、みんなが一丸となってやったという感じです。分野、分野でバラバラだった教育を、みんなで考えようというかたちになってきた。

下村／この大きな絵を描いてくれたのは岩田伸一郎先生だったので、これをつくるのは、たいへんだったと思います。そのおかげで、今の議論がどんどん発展できるのだと。

北野／一人ひとりの先生がそういう意識をもってくれた。篠崎健一先生がこれをつくるために、莫大なデータの整理をしてくれたし、それを会議体でなく、一人ひとりが責任をもってやった。

亀井／しかも、岩田先生も篠崎先生も日大出身ではないんですよね。

浅野／それが生産の強みです。

北野／そこが噛み合っているのがいいんですよね。

永井／いろいろなキャリアやいろいろな出身者がいるからこそイノベートできるんですよね。

塩川／これからが楽しみであり、正念場ですね。みなさん、今日はありがとうございました。